

---

## 研究論文

---

# 民主主義を生かすもの

——プラグマティズムと理想主義——

小島軍造

## 1

現在、我国の民主主義は問われている。民主主義に反対する主張のうちで、単純だが、それだけ影響力のあるものは、我国が第二次大戦後、改めて、——我国には近い過去を振りかえって見ても、自由民権運動や大正デモクラシーがあった。——民主主義を国の基本方針として受取った時の事情に対する抗議として成立している。しかし、「占領下の強圧によるもの」ということと、「だから、それは無価値だ」と考えることとは、別の事柄である。それを受取った時の「事情」と、受取ったものが、よいものか、わるいものかの問題とは異っている。病人の好みにさからって、多少とも強制的に与えられた薬は、すべてよくないと断定できないのと同様である。

我々は誰も、単にその時々「都合」によって行動するものではなく、「理由」によって行動する。尤も、その場合、「理由」づけに巧みな者と、そうでないものがある。したがって、我々の誰もが「水も洩さぬ」論理的正確さで民主主義を受とめていたということとはできない。しかし、たとえ、言葉での表現は稚拙ではあっても、直観的に民主主義のよさを感じとっているものでなければ、戦後25年にも亘って、とにかく、民主憲法を中核とした社会生活を維持しえた筈はない。勿論、さまざまな非民主的行動があるが、同時に、民主憲法を拠点として、そこからの逸脱を回復しようとする運動が熾烈であることも無視することはできない。例えば、教科書裁判の判決をどのように受けとめるかは、人各々異っていようとも、このことに示された人々

の関心の深さは、決して、見のがすことはできない。

民主主義の理由を追求することは、必要なことであるし、私共も、些か、この点努力してきたし、今後もその努力は続けたいと思う。「理由」によって行動することこそ、現代の人間に強く要請される態度であると思うからである。しかし、私は同時に、民主主義を選択する「理由」を単に、プログラムの、教条的に並べたてることの空しさをも感ずるものである。人間は往々、「理由」が論理的に整然と成立することで——尤も、それ自身極めて困難な仕事ではあるが——満足し、問題にみちた現実を置去りにして、自己陶醉におち込みやすいからである。民主主義の理由は、論理的に矛盾なく（consequent）に構成されることは必要であるが、その効果は、具体的現実のうちに結果として現われる（consequent）のでなければ、無意味である。しかし、理由の探究は、その「理由」を構成している主義・主張が、どのように、実現されるかの問題を追求する余力を残していない場合が多い。

このことに加えて、人間の陥りやすい不徹底さには、現実の世界の事物を、配置換えしたり、作り直したりする面倒を避けて、観念の世界だけで、つじつまを合わせようとする傾向がある。このあくまでも「手をよごさないでいたい」という気持は、極めて、根強いものであり、これは丁度、交通安全の立派な標語ができあがれば、直ちに交通事故が減少するかのよう錯覚するようなものである。看板を書き換えるだけで、実際の品物がよくなったと思わせるのと同様である。交通事故を減少させるためには、自動車の構造や道路条件の整備修正とか、運転免許制度の改善とかの実際に骨の折れる仕事にまつ外ないので、標語に凝ることは、必要なさまざまな条件整備の仕事のうちホンの少部分を占めるにすぎない。このことは勿論、標語の不必要や無益さをいっているのではなく、交通の安全確保という目的をもった一連の経験の全体から見て、なされるべき仕事の軽重を比較したまでである。

民主生活の樹立という目的的行動の場合も、重要なことは、そのような生活が実際に具体的現実の中に打ちたてられることで、民主主義的宣言や、スローガンが豊富になるということではない。ここに、「宣言」「スローガン」

「標語」あるいは、「原理」「主義」「理想」等をそれらが現実世界で果たす「実効」の側面から、捉え直す立場、すなわち、プラグマティズムの立場<sup>1)</sup>が、民主主義と不可分離に現われてくる必要があったことは周知の通りである。したがって、ここでは、民主主義のよきも、経験そのものにおいて、見出されるべきであって、その主張が、単に立派な大義名分の旗印を背負っているか否かではない。ある「主張」の正否は、あくまでも、その主張の結果として実際の場に現われるものによって、検証されなければならないからである。すなわち、ここでは、その主張の首尾一貫性・斉合性は、その表現の論理においてではなく、その結果として出現したもの(consequence)に照らして、つじつまが合わされる。このような現実世界の結果として生起するものを重視するプラグマティックな考え方の実例は、たとえば、デューイが、「なぜ民主主義を選ぶか」という問いに対する彼の答えの中にハッキリ示されているように思う。すなわち、彼は、「民主主義が、自由や平等を保証し、平和な人間関係を促進するから」というような、いわば、価値のことばの羅列で答えようとはしないで、あくまでも「経験」のことばで答えようとしている。そして、彼は究極的に、「民主的社會体制 (democratic social arrangements)は、人間の経験を質的に向上させるものだ」という信念に立つものであることを示している<sup>2)</sup>。そして、「個人の自由や人間関係における礼節や親切を重んじるという建前は、結局、これらのことが、抑圧や強制という方法よりも、質の高い経験をもたらし<sup>2)</sup>」ものであるという確信を、民主主義選択の最大の理由としている。このような彼の考え方は、彼の書物の随処に見ることができるが、次に引用する箇所などは、彼の民主主義に対する態度を極めて明白に示しているものといえよう。すなわち、「結局、民主主義という主義は個人の尊厳と価値とを重んじる道徳的事業なのだ。我々人間は、誰しも、好むと好まざるとにかかわらず、人間にとっての最大の実験ともいうべき次のような実験にたずさわっている。すなわち、一人一人の生活が同時に、ことばの最深の意味において、彼自身に役立つだけでなく、他人の個性を築く上にも助けとなるような仕方で、共同生活をするという実験に。

——そして、民主主義こそは、お互に尊敬し合い、ゆるし合い、有無相通じ合い、経験を分かち合うことによって、人類をして、以上の実験に成功させる唯一の手段なのである。<sup>3)</sup>」

以上の言葉によって我々は、デューイにとって、民主主義が何であったかを極めてハッキリと知ることができる。すなわち、そこでは、我々の社会生活とは、人間そのものに対する、それ自身、巨大な挑戦の場であり、人間性が我々の深奥の期待に応えうるか否かの実験の場として把捉されている。すなわち、この実験の目標は、各人の行動が、自他の成長に、「言葉の最も深い意味において」役立つようになされうるかどうか、を見ることである。経験の質を見分ける標識も、ここに在るといえる。このことは、したがって、人間の経験に賭けられたデューイの最も深い期待ということができよう。ここでは、本来、相互に尊重し合えるような間柄（経験）そのものが希求されているのであり、そうした経験を可能にするであろう条件作りとして、民主主義的ゆき方が要求されているのである。すなわち、ここでは、人間の生活に賭けられた深い期待に応える生活の仕方として、民主主義が考えられており、ここに、民主主義への信頼が根差している。したがって、民主主義とは、単に、個人又は集団の利害に仕える方法としてではなく、人間経験の質の向上を約束する生活の仕方として把捉されている。ここに、民主主義選択の「理由」がある。それは、すなわち人生に賭けられた期待に根差しており、民主主義こそ、この期待に応えることができるものという「確信」にたっている。

若しも、このような根源的期待や「確信」を、ぬきにして、民主主義を考え、その方法の原理としてのプラグマティズムを考えるならば、それらは、丁度、ある民族を、エコノミック・アニマルと蔑称するときの、まさに、そのアニマルに奉仕する行動原理と成り下ってしまうであろう。したがって、民主主義が、現に受けつつあるさまざまな批判に堪えうるものであるか否かは、まさに、この点——すなわち、「理由」「根源的期待」「確信」の追求——に懸っているとわなければならない。それゆえ、われわれは、ここに、

プラグマティズムが、「理想」及び「理想主義」に対して、屢々示す攻撃的姿勢を仔細に検討するという道を通して、われわれが考える民主主義を出来るだけ明らかにしたいと思う。

## 2

アポロ計画による人間の月面到着は、たしかに、科学技術のめざましい成果を物語っている。科学技術は、人間の可能性への全面的信頼に立って、推理し、実験し、仮説を立て、その正否を検証するという過程を繰返す。すなわち、科学的探求の過程である。そして、仮説の正否は、経験的世界に現われる結果によって驗めされる。ここではいくら、立派な理想や目的をもっていても、それに到達する手段方法を欠くならば、単なる空想であり、幻想であるにすぎない。ここでは、理想や原理が、唯、それだけで尊重されるのではなく、それにしたがってゆけば、理想や原理の指し示す目的地に到達することのできる方途を伴っているとき、始めてそれらは尊重される。いいかえれば、理想や原理そのものが、同時にその実現の方法と不可分に結合しているべきことを示している。このように、ある理論なり概念なりの正否を、それがもたらす<sup>●●●●</sup>実際の成果によって判断しようとする立場を、プラグマティズムと呼んでおり、その場合の実際の成果とは、目に見える外界の出来事（変化）を指していることはいうまでもない。

したがって、ここでは、ある事柄についての理論の正否は、その理論によってあらかじめ計算した通りの結果が、<sup>●●●●</sup>実際にでてくるかどうかにかかっている。月面到着、そして地球への帰還という困難な仕事にしても、あらかじめ研究を重ね、計算を精密にすることによって、いわば、寸分の狂いのない計画を仕組むことができる。そして、仕組まれた計画にしたがってゆけば、期待通りの結果が現われる。自然支配に発揮された科学技術のこのような力を、複雑な社会問題の解決のために利用することができたら、人間の福祉にとって極めて望ましいことであろうと、誰も考える。多くのプラグマティストもそのように考えた。大体、プラグマティズムそのものは、このような

意図に促がされて発展してきた立場といえよう。

しかし、人間は精密な科学技術の力によって、月着陸に成功はしたが、その同じ人間が住む地上の世界においては、相変らず戦争は絶えず、地域によっては貧困による餓死さえあり、人種差別による闘争は続けられ、個人間、民族間、国際間の信頼の喪失は増大の傾向を辿っている。また、最近益々注目されだした「公害」の問題は、人間による「すぐれた？」環境開発の結果ではあるが、一方、地球上の生物の生存を困難にするような「荒廃」が増大するという矛盾が起っている。成程、未来の出来事を予測する場合の科学の（比較的）正確さに魅せられている人は多い。初期のプラグマティストは、産業革命の成果に刺激され、現代のプラグマティストは、宇宙開発の技術に圧倒されている。科学的に正確に計算すれば、未来の出来事の予測は可能であり、未来はまさにそのように生起すると信じられている。したがって、プラグマティズムにおいては、およそ、目的というに値するものは、そこに到達するまでの道筋を、わがものとしていなければならない。帰結にまで到達する方途が企画されていなければならない。「月にゆきたい」ということは、単なる願望であって、まだ、目的ということとはできない。しかし、この単なる願望を梃子にして、さまざまな仮説を設定し、推理、実験、検証をくり返してゆくことが科学であるとしたら、科学は単なる願望を目的にまで成長させる。「月着陸」という出来事もこうした願望に端を発したと見なければならない。こうした原初的願望をどのように受けとめるかによって、自然に対する二つの態度が現われる。一は文明的態度（文明を産む態度）ともいうべきもので、人間が自然に対して主体的に働きかけて、それを、人間側の企画にしたがって変容しようとする態度であり、他は、自然を外面的に変えようとしなくて、むしろ、自己内心の変化によって、人間に対する自然の影響を屈折させて受取ろうとするものである。

文明的態度とは、いうまでもなく、近代科学を生んだ態度であるが、それは、人間の中に生れる衝動・欲望を、いわば、無差別に容認して、それらに対して、その達成のための手段を提供しようとするものである。人間の中に

湧き起る欲望を無差別に容認するということは、人が欲望以前にあらかじめ持っている価値尺度(慣習や制度や既存の人間観・世界観に影響されている)を適用して、湧き起る欲望にいち早く、よし・あしのレッテルをはって、それを、芽のうちに、摘みとることを差控える態度である。欲望を容認し、これに応えるためには、手段を考究しなければならない。そして、手段を考えることは、そこで欲望が達成される現実世界の諸条件を研究することである。手段とは、実際には、現実的諸条件をコントロールすることだからである。手段の考案工夫において、人間は単なる願望や空想にとどまることなく、敢えて、具体的でしかも頑固な現実と対決しなければならない。手段・方法をまっぴらで、頭の中で描かれた計画は始めて実現されるのだから。それ故、手段とは、現実を期待どおりに動かすからくり(装置)に外ならない。手段の考察において、人間は否応なしに、経験的、実証的となる。経験を尊重し、実証的過程を積み重ねることなしに、現実の条件を知り、これをコントロールすることは出来ないからである。

このように、人間が抱く単純素朴な願望を既存の価値観にしたがって斥けることなく、その可能の条件を既知のものからの推理によって、実証的に、冷静に追求しつづけたのは科学である。人間が欲しいものを手に入れるには、何らかの行動を必要とするが、この行動の原理として「科学」の有効性が「公認」されてきたのは周知のとおりである。そして、文明の領域は、依然として、拡大に次ぐ拡大の一途を辿っている。しかし、ここに、プラグマティズムは極めて大きな困難に直面しなければならない。それは、すなわち、人間の衝動や願望の複雑性と多様性とを見落すわけにゆかないからである。すなわち、人間の多様な願望の中には、その実現の方途を科学の力によって、比較的容易に見出しうるものと、そうでないものがある。そして、ここでの困難な問題というのは人間生活においては、その実現の手段方法を、科学的に用意することの出来ない願望や希求を、直ちに虚妄なる幻想として斥けることはできないという点である。

成程、プラグマティズムは、科学のゆき方に大きく刺激された考え方であ

り、その限りにおいて、目に見え手に触れることのできる結果、すなわち、感覚的に知覚できる効果によって、ある概念や理論の正否・真偽を見ようとする立場ではあるが、それ自身、科学の哲学として終始している訳ではない。むしろ、自然的対象以外の世界、殊に、人間的・社会的問題の領域にも科学的考え方を拡大して、人間の福祉を増進しようとするの方が、その主たるねらいであった。そして、科学的考え方への信頼は、社会問題の領域における主観的・独断的判断の横行を斥けて、問題解決の理論が、より公共性を帯びるべきことを意図したものであり、それによって、その理論の問題解決への的確性と客観性とを確保しようとしたものであろう。したがって、それは、人間における自然の研究ではなく、すでに、目的や価値を把持している人間の研究であるし、社会関係から遊離孤立している自然的個人の研究ではなく、本来的に他との関係においてある人間の行動についての研究である。それゆえ、いまここではそのような人間の行動において、概念や理念や理想が実際にどのような役割を果しているかを、主として、デューイの見解を参照しながら検討してゆきたい。そして、そこで哲学にどのようなはたらきが期待されているかを明らかにしてみたいと思う。

## 3

デューイは、哲学の仕事は、経験を越えた究極的実在を探究する形而上学に見出したのではなく、「人間が非常に激しい執着を持つ経験的な事柄を明らかにしようという努力<sup>4)</sup>」として把捉した。したがって彼にとっては、「社会的目的および願望をめぐる人間衝突の場面<sup>4)</sup>」が哲学の舞台となる。それゆえ、哲学本来の仕事は「その時代の社会的および道徳的な闘争について、人びとの観念を明晰にすることにある<sup>4)</sup>」し、「哲学の目的は、人間に可能な限り、こうした闘争を処理する機関になることである<sup>4)</sup>」。このようにして哲学は「人類を動かす道徳的力を明らかにすることによって、一層、秩序だった、一層、知性的な幸福を得たいという願望に奉仕することになる<sup>4)</sup>」。ここでは、哲学は問題解決的思考として把捉され、したがって、哲学の本質直観的、諦観的

性格は弱められている。このように、ここでは、哲学的思考は、あくまでも、そのプラグマティックの性格において、把えられており、「現実を変えるものとしての思考」という考え方に終始している。

「現実を変える」というとき、直ちに、「どの方向に？」という問いが出てくることは当然であるが、デューイは、この問いに「人類を動かす道徳的力を明らかにすることによって、一層秩序だった、一層知的な幸福を得たいとの願望に奉仕する」という言葉で答えている。これによって、我々は、プラグマティズムを、単なる「自然主義」と混同する危険は避けられる。すなわち、そこでは、「人間の幸福」という極めて、あいまいな概念に「一層秩序だった、一層知性的な」という形容詞をつけることによって、その内容を、示唆しているからである。ここに、「幸福」の限定づけが行なわれている。すなわち、そこではまず、自己中心的な、あるいは、集団中心的な幸福が排除されていると見ることができる。とかく、恣意的、主観的になり易い「幸福」概念の解釈が、すくなくも、他との関係において、一層、公共の場に持ちだされていると見ることができる。そして、そのような「幸福」に対して、人間は、根元的希求 (aspirations) を抱く存在であることが宣言されている。このように、人間は、いわば「筋の通った」<sup>5)</sup>幸福に対して、根元的希求を抱くのであって、これがある行動の「実際の効果」の判定の基準をなしているといえる。そして、このような希求は根元的であるかぎりにおいて、何物をも前提しないとわなければならない。

すでにこのように、根元的希求の対象である「幸福」に形容詞がつけられて、限定されているとすれば、人間の多様な衝動が、実は、すべて同列に容認されているのでなく、「筋が通って」いるか否かが問題とされていると見なければならない。唯、デューイの場合、その「筋」は、経験の外に、経験に先立って、固定的に確立している「価値」や「理想」ではなく、あくまでも、経験の連続の立場に立って、一層良質の経験を続けさせるような条件を備えたものでなければならない。ここに、彼のプラグマティズムにおける、「現実尊重」、「現在重視」の思想が結びついている。彼においては、哲学が

解決すべき問題は「現在」の事情のうちにあるので、それは、遠い過去の出来事の解釈でもなければ、遙かなる未来への気使いや恐怖でもない。過去のこと「現在」から振り返ることで意味が生じ、未来のことも、「現在」の延長線上に置かれて始めてコントロール可能のものとなる。これは、経験・連続・成長の理論からの当然の結論である。われわれの経験は一刻も停止することなく、過去・現在・未来へと連続的に展開される。「成長は、ある偶然の瞬間に完成するというものでなく、未来へ未来へと進んでゆく<sup>6)</sup>。」そして、未来は現在が成長したものであるかぎり、「現在の経験をできるだけ豊富に、そして、意味深くするように努めることが必要となる。現在はガッチリと未来に喰い込んでゆく<sup>7)</sup>のだから、」したがって、「現在の経験の意味を増す<sup>7)</sup>ように行為せよ。」ということが、プラグマティズムにおける無上命法となる。

それゆえ、彼において「進歩とは、意味を充実させ意味を明確にしてゆく現在の再建であり、退歩とは、意味、決断、認識が、現に脱落してゆくことである<sup>8)</sup>。」したがって、当為は、目前脚下の現実的状况を超絶した「命令」や「理想」の中にあるのではない。それは常に具体的事態そのものが、どうあるべきかに結びつけられている。ここにおいては、具体的事態は、頭の中に描いた「理想」に先立つ事実である。したがって彼は、現在は、未来において達成されるべき理想的状態への手段にすぎない、と見えようとする所謂、「理想主義」に反対する。この「理想主義」とは、現在を未来にかかげた「理想」のために犠牲にしてもかまわない、否、そうしなければ、理想は達成できないのだ、という考え方として理解されている。このような「理想主義」に反対するデューイは、「理想」そのものが、無意味だというのではなく、「現在」に君臨し、現在を圧倒し窒息させかねないような理想に対して、抗議しているのである。その理由は、そのような「理想主義」は、生の拠点であり、あらゆる可能性の根拠である「現在」そのものを圧殺し、現在の実情を蹂躪してかえりみようとしないからである。

「理想主義」に対抗して、現在を尊重しようとするデューイのこのような

態度は、屢々「現状維持的」とか、「現実妥協的」とかと批難される。しかし、これに対しては、彼のいう「現在尊重」は決して、「現状肯定」を意味しないことを指摘する必要がある。彼は現在を肯定するにしても、否定するにしても、その出発点は、現在以外にないといっているにすぎない。生を成長と考え、経験の連続として把握しようとする思想において、たとえ、現状を維持しようと思っても、それは、理論的に不可能である。「現在」はつねに、変化のうちにあり、現実の「今」は固定することはできない。生は衝動的内的エネルギーに触発されて生動する。それは、文字通り、「生々発展」であって、瞬時も止まることはない。デューイはいつている。「ビジネスマンは、今日の負債と資産とを、昨日の負債と資産とにくらべながら進み、このようにして示された動きの研究を、現存する環境の条件の研究と結合して明日へのプランを打ち出してゆく。この間の事情は、生きるというビジネスについても異なるものではない。」<sup>9)</sup>すなわち、生きるということは、目前脚下の課題を具体的に処理し、解決してゆくことのうちに成立する。したがって「理想」は、あくまでも現在を知性的合理的に延長した線上にあるべきもので、現在に「断絶」したものとは考えることはできない。すなわち、その時々現在の現在において夫々なすべきことを含んでいる環境的状况に隔絶した「理想」という観念はここでは成立の余地をもたない。

状況における主体、すなわち、環境との「やりとり」における主体は、衝動の主体である。しかし、衝動は、いつまでも<sup>(き)</sup>生のままでいるのではなく、阻まれれば欲求となり、それに知性が協働して、目的にまで成長する。<sup>10)</sup>目的とは、衝動・欲求の達成のために、知性によって構案編成された手段的過程であり、その活動の終点までの案内図であり、企画案（青写真）である。このように、目的とは知性によって編成された手段の体系であるかぎり、「目的は手段を選ばない」のではなく、手段の選択、その知的探究そのものが目的成立の必須条件である。それゆえ、デューイは、単純に目的や理想を斥けたのではなく、現在からの成長の見通しを超える「外から押しつけられる」理想を成長を阻害するものとして斥けたのである。したがって、手段の探究を

伴わない「理想」は、いくらそこに情熱が傾けられていても、結局、空想であり、場合によっては、**狂想**であることを指摘しようとしたのである。そこに傾けられる情熱が大きければ大きい程、かえって、目前脚下の現実を破壊し、明日への建設の土台となり、素材となるべきものを粉砕してしまう危険があることを指摘しようとしたのである。いいかえれば彼は、**狂熱的に現状否定的な**、そして、「如何なる犠牲を払っても！」と現状に迫る「理想」は斥けたが、**現実をより意味あるように展開させる手段の開発を伴っている**「理想」は重視したことはない。

したがって、成長にとって、「過去の記憶、現在についての観察、**未来の予見は不可欠である**。しかし、これらが不可欠なのは、**現在の解放**にとってであり、**行動を豊かにしてゆく成長**にとってである。<sup>11)</sup>したがって、「あらゆる経験も、**続いて起る経験の成長を阻止したり、ゆがめたりするような結果**をもたらすならば、それは**非教育的である**。」<sup>12)</sup>と考へ、「**あらゆる経験は、好むと好まざるとにかかわらず、**続いて起る経験のなかに生きつづける****」<sup>13)</sup>とするデューイの考へを、「**現状維持的**」と断定することはできない。彼はいう。「私が反対してきたのは、**理想の權威や価値が、何か理想より先に完成している何者かにかかっている、という考へ方に対してである**」<sup>14)</sup>したがって、「理想」に対する彼の態度は、**現実の欠陥に対してジッとしていられない熱情から出発しているだけに、単に現実につきつけられただけの理想は、**現実の必要を置去りにして、超絶的世界への逃避を促がすもの**と考へるものである**。理想は**現実化されることこそ重要なので、この現実化の手段を用意するものは、既述のように、知性のはたらきである**。しかし、**知性に活力を与え、いきいきとはたらかせるものは、**社会をよりよくしようとする情熱**でなければならない**。それゆへ、彼は「**正義と安定とに対する愛着や熱情的希求は、人間の性質の中に現実に存在する**。……そして、**強烈な感情は行動のかたちをとって現われて、**制度風習を破壊するかも知れない****。しかし、**よりよきものの誕生を保証する唯一のものは、**情熱と知性との結婚****にある。」<sup>15)</sup>と考へている。

生を自己更新の過程として把えるとき、知性は常に人間的現実の建直しのために働いていることになる。人間は常に「よりよく」という根元的希求に促がされて、よりよくなる方策を知性に期待する。根元的希求が強烈であればある程、知性に対するその期待もきびしく大きい。いま、知性のはたらきの過程並びに果実を科学と呼びうるとしたら、科学は人間の「よりよく」という根元的希求に仕えて手段的役割を果すことになる。しかし「よりよく」という根元的希求そのものは、科学の所産とはいえない。いいかえれば、科学は放っておいても、その活動の内部から「一層筋の通った幸福」をおのずから生み出すものではない。『人間にとって科学とは何か』という書物において、著者たちは、人間には、科学をつくりだす作用及び価値体系をつくりだす作用として、それぞれ「根元的合理性と根元的目的性が共存している」<sup>16)</sup>そして、「科学というものは、なにか、根元的なところからでてくる。その根元的な力は、いわゆる価値などというものから離れたものではないか。」<sup>17)</sup>といい、同時に一方、人間は価値を考え、目的をもつ存在であって、これも極めて、根元的な衝動であり、希求であることを述べている。

#### 4

人間が以上のような基本構造をもつものであるとすると、行動の進行において、その効果をたしかめながら進むというプラグマティズムの原則は、必ずしも極めて単純明白なものとして理解されるとは限らない。何故ならば、根元的合理性の線上における効果と、根元的目的性の線上における効果とは必ずしも一致しないからである。そして、一方の効果で他方の効果を代理させたり、一方を他方で置き換えたりすることは不可能である。尤も、人間的価値の世界に科学のゆき方を持ち込もうとしたプラグマティズムの企てたりとも、行動の効果の測定を科学の世界と価値の世界とで、同一基準にしようとした訳ではない。唯、両者に共通する点は、手段を伴わない目的それ自体という考え方が否定されているということである。在来の古典的理想主義においては、およそ、目的とか理想とかは、連続的経験の外側から与えられる

もので、経験はそれを実現すべく義務づけられる。目的や理想は、それを実現する手段に対して超絶的であり、いわば、断言命法的に君臨する。したがってそれらは、人間の経験によって検証される仮説ではなく、人間の経験をそれによってコントロールすべき「原理」である。プラグマティズムが抗議しているのは、このような目的・手段の考え方そのものである。

しかし、プラグマティズム特有の「目的とは、すでに、手段の構想を含んだもの」という考え方は、科学的技術的問題の処理には適当であるとしても、果して人間的社会的問題の解決に役立つのか否かが、プラグマティズムにとっての重大問題となる。科学においては、やがて目的になりうる空想や思いつきは、まず、仮説としてとりあげられる。仮説は経験の中でテストされる。すなわち、仮説で主張されているものが、経験的テストの過程で生れる方法によって実現が可能となれば、その仮説は目的と成る。したがって、目的は、ここでは、経験的に獲得される。出来る見込みのたったものしか目的にはならない。出来る見込みのたないものは、空想であり幻想である。それゆえ、目的や理想をまず仮説として見ることは、それらに柔軟性をもたせることである。いいかえれば、それらを連続的経験の場の中に投げ出して、その有効性をテストする。すなわち、現存する具体的条件との相互交渉の現場でテストして、仮説そのものの修正を期するのである。

ところが、人間的社会的関係における「理想」は、必ずしも、経験的過程の中で作り出されるものばかりではなく、経験に先立って、すでに、「理想」「目的」という整ったかたちで与えられている場合が多い。それは、往々、人間による修正を許さぬ峻厳さで、現実に臨んでいる。例えば、基本的人権の尊重とか、平和の促進とかの理想目的は、今直ちに、それに対する有効適切な手段を考えることができないとしても、虚妄なる空想であるとして破棄することはできない。平和運動の効果が容易に上がらないからといって、「平和」の価値を見限るべきではないと同様である。ここに、プラグマティズムが直面する最も困難な問題がある。平和への手段のテストが、武器の効率のテストより、はるかに困難な理由はここにある。これは、「平和」とか、

「人権尊重」とかは、人間にとって「究極目的」であって、あれこれの人間の欲求に仕える手段的目的ではないことを示している。例えば、平和運動をよくやる為にはさまざまな手段が必要である。ビラやパンフレットの印刷にしても、鮮明で雨にも強いものであることが必要で、そのためには技術的研究が必要である。この点、商業広告の場合と異るところはない。だからといって、後者が目的とする一企業の繁栄がそれ自身、人間にとって究極目的とはいえない点をも、この間の相違は明らかである。

人生は目的・手段の系列であり、連続的発展の過程である限り、ある目標を現存する社会的条件との相互作用の現場でテストし、それによって、目標そのものの修正を期待する。そして、具体的経験の場において、続いて起る経験を豊かにするような目標が選択され、漸次、精練されてゆく。そのような目標こそ経験の連続を渋滞させたり、窒息させたりしないものとして、目的として残されてゆく。しかし、人間は同時に常に、その究極的意味を問われている存在である。逆にいえば、究極目的を課せられている存在である。

したがって、ここでは、人間の可能性を極限にまで誇示したような「月面到着」というような出来事に対して、誰もが「一体、それが人間にとってどれ程の意味があるのか」という問いを発する権利を保留しているし、同時にこのことは、望ましい経験と、望ましくない経験とを別ける標識の設定を困難にしている。ここでは、経験が唯、渋滞なくすべってゆけばよいというのではなく、あとにつづく経験が、より意味深く、より稔り豊かになるように行為することが求められている。そして、この場合、その意味や稔りは人間の衝動的欲求から見てのことであることは解るが、同時に、究極的意味への意志を負わされている人間は必ずしも、意味を「当初の欲求につながる目標上」に限定する義務はないのである。したがって人生の現実においては、経験が渋滞なく連続してゆくというよりも、至る所で「断絶」に出会いながら、ジグザグに進んでゆかざるを得ない場合が極めて多いことも了解できる。このことを別の言葉でいえば、人間は常に、衝動的欲求につながる目標を、究極的意味（又は目的）で裏打ちしようとしている。そして、そのような裏打

ちが成功しないときには、断絶や自棄や絶望が発生して、経験のそれ以上の成長は不可能となる。既に述べたように、人間は経験の流れを渋滞させないよう、目的を固定させないで柔軟性を持たせようとする。すなわち、所謂、「角を矯めて牛を殺さない」ために、目標の厳格な施行を緩和しようとする。しかし、この場合も、そのような緩和が、より目標に適うことが確認された時になされるので、その施行上の困難を理由に目標そのものをズルズルと後退させることではない。そして、この過程においても、目標が実現されるべき世界の現実の条件のリアルな研究の必要なことはいうまでもないことではあるが。

ところが、究極的目的の問題となると、人間の知性をフルに活用させさえすれば必ず、そこへの到達が保証されるというようなものではない。だからといって、実現への意志を放棄してしまってよいものでもない。現代の民主主義が問われているのも、それが究極的目的への接近の困難さに圧倒されて、実現への新鮮な意志を喪失しているからに外ならない。そこに残されたものは、単なる「宣言」の汨濫だけである。すでに小文の（I）において見てきたように、デューイにおいても、民主主義の究極的意味を論じており、それら意味を表わす「理想目的」の存在と力とを説いている。すなわち、「理想目的が理想という形において実在することは疑をいれない。それは、行為の上に及ぼす歴然たる力<sup>18)</sup>によって、確証されている」のである。そして、「理想は、思惟と想像の作用によって把捉される」ものであり、「思惟と想像の作用とは、まだ実現されない事柄を、われわれの心の中に宿らせ、それによって、われわれを駆りたてる力<sup>18)</sup>」と解されている。したがって、ここに所謂「思惟と想像の作用」は、まさに、根元的目的性の作用と見ることができよう。

それ故、ある経験の組合せや、連続の傾向を、その次に従う経験にとって教育的であるとか、有意義だとか見てとらせるものは、根元的目的性の作用によるものであって、根元的合理性の所産ではない。普通、立場、イデオロギー、価値観、世界観等といわれるものは、皆この「根元的目的性」の作用

に基づくものである。人間が目的的行動をとり、目的論が成立するのも、この「根元的目的性」の作用によって、価値の体系が与えられるからである。このように見てくると、仮説、推理、実験、検証というようなプロセスを辿る科学的探究と、人間的・道徳的行動とは、その出発拠点の構造を異にしている。すなわち、前者においては、「思いつき」をも含む「仮説」であって、探求の過程においてたしかめられて「理論」にまで成長してゆくものであるが、後者にあっては、それは経験のプロセスにおいて、立証の方途をもたないが、しかも、始めから「確信」として行動を始動する力、すなわち、「行為の上に及ぼす歴然たる力」そのものなのである。

## 5

以上のような反省は、やはり、民主主義を存続させるためには、民主主義の「理由」を問い続けてゆく必要のあることを示している。民主主義とは決して、その時々の人間の雑多な必要に奉仕する便利<sup>・</sup>な政府や制度の問題なのではなく、矢張、通すべき「筋」をもつ一つのドクトリンである。筋とはすなわち、理由であるが、その「筋」を明らかにすることが、民主主義を生かすために最も重要な仕事であることを示している。すなわち、夫々の民主主義は、通すべき夫々の「筋」をもっている。そして、筋は現実の経験的世界で通されなければならないので、具体的環境的条件の知性的（プラグマティックな）研究を不可欠とするが、しかし、筋そのものは、そのような研究の過程において作り出されたものでなく、それらの過程に先立っている。この辺の事情を極めてハッキリうかがえるのはリンゼイの『民主主義の本質』<sup>19)</sup>である。

リンゼイは、近代デモクラシーの源流を16世紀から17世紀にかけて、英国に起ったピューリタン活動に索めている。すなわち、「17世紀に始めて考え出された、近代民主主義の始源に遡って考えてみれば、当時、ひとびとの多くは、自治的な集会（congregation）において素朴な民主的統治のもたらす素晴らしい満足を生き生きと経験していた。近代民主主義の観念もこれらのひ

とびとによってはじめて考え出された。かれらは、国家もまた、これを模範として組織されねばならない、と要求した。<sup>20)</sup>そうした集会を満たしている精神は、人間平等に対する神秘的確信であった。その内容は「もっとも貧しいひとでさえも生きるべき生命をもっているので、ほかの誰からも勝手に取扱われたり、規制されたり利用されたりしてはならないものである。<sup>21)</sup>富、能力、学識、賢愚、善悪等々は、その人がその人の生命を生きる事柄にとっては実に無に等しいことであるという確信これである。これを「人間平等についての神秘的確信」<sup>22)</sup>というのは、それが、経験から得られた知識ではなく、啓示に基く信仰であることを語っている。即ち、万人祭司の神学的理論を、日常的言葉でいい表わしたものである。そして、リンゼイは、このような信念は「科学的な理論でもなければ、常識からくる教えでもない。実に、宗教的かつ道徳的原理である。<sup>23)</sup>そしてこの原理は、「誰でも、自分自身の同意によらずしては支配される義務を負わないという原理」<sup>24)</sup>につながるものである。

人間平等に対するこのピューリタンの信仰は具体的歴史的世界においては、特定の階層（国王や貴族）が特権を持つという不合理に対する闘争として発展したことは周知の通りである。しかし、この神の前での平等という理念を具現するに当って、「歴史的慣習的条件の支配を脱却し切ってはいなかったことは止むをえないことであった。例えば、平等主義者（Levellers）の唱えた選挙権の平等も成年男子に限られていたこと、この理念が国境で足ぶみしたこと（植民地住民の差別撤廃は、すくなくともガンジーまで待たなければならなかった。）等不徹底さを残しているとしても、当時最も顕著な不平等に対して闘った人民の力は決して過少評価することはできない。したがって、啓示的知識が、この世を変えてゆく過程において示す、さまざまな矛盾や不徹底さを取除くためには、それが行なわらるべきこの世の具体的な条件の研究を不可欠にする。このような研究は決して、この世と妥協することではない。むしろ、この研究を怠るがゆえに、たとえば、この世の慣習の無批判的受容などを結果する。ここにこそ、信仰と知性との協働を必要とする。ピューリタン運動も、信仰の世界と具体的世界（この世）とを、平行線的に眺めてい

る立場ではなく、二つの世界を噛み合せようとする情熱に促がされていたものである限り、所謂「情熱と知性との結婚」、信仰と知性との協働の問題は決して、軽視することはできない。しかし、この場合、知性はあくまでも信仰的目的に対する手段発見の役割を演ずるものであって、決して、知性が信仰に優先するものでないことは、断るまでもない。

近代民主主義の出発拠点ともいべき「基本的人権」の概念も経験的に検証される概念ではなく、信念として確信されるべき概念であることを、改めて確認しておく必要がある。日本国憲法第11条には、「国民は、すべての基本的人権の享有を妨げられない。この法が国民に保障する基本的人権は、侵すことのできない永久の権利として、現在及び将来の国民に与えられる。」と規定されている。このように極めて明白に言明されている基本的人権なるものは、**事実**、我々に与えられて、我々が持つて（享有して）いるものであろうか。勿論、「人間が人間たる以上当然に一定の権利を不可侵不可譲のものとして持つ<sup>25)</sup>」とは、我々が胃や肺をもつ<sup>25)</sup>というように、身体上の**事実**として持っていることではない。ところが、また、「ある意味では、人間は何時でも、どんな政治体制のもとでも、そのような何物か（人格的尊厳の基石）を、つねに当然にもっていたわけである。奴隷制下でも、専制政治下でも、外国の征服圧制下であっても、人間が人間たる以上それを失っていたとはいえないと思われる。しかし、そこで、“もつ”とか“もたない”とかいわれることは、そのような次元の事柄ではないであろう。すなわち、**事実**ではなくて**当為**が問題なのである<sup>25)</sup>。」したがって、基本的人権をもつ<sup>25)</sup>とは、「人間はこれを他人なかんづく国家にたいして不可侵のものとして要求できる**権利**をもつ<sup>25)</sup>」ということである。このように、基本的人権の概念は、権利の要求、自由の要求に根差すものであり、人間を包み込もうとする目前直接の組織に対する独立宣言でもある近代的個人の自由に基づくものである。それゆえ、こうした要求を持たない人に対しては、この理念を「検証しうる客観的事実によって理由づけ、論証することは困難なこと<sup>26)</sup>」である。したがって、基本的人権は「自然の事象のごとく、人間の主観をはなれて純粹に客観的に

存在するものではない。」すなわち、それは、主体の姿勢と相関的な概念<sup>26)</sup>であって、「人間解放の要求を前提にしないでは、そもそも基本的人権という理念そのものがでてこない。」<sup>27)</sup>したがって、それは「一定の価値観に立った人間の意欲的な精神活動によってはじめて構想され、不屈の現実的活動によって実現されるものである」<sup>28)</sup>といえよう。

このように、基本的人権の主張は、あらゆる人工的・人為的な組織や体制を以ってしても制圧し尽くすことのできない最も根源的な人間の要求に基づくものである。そしてこの場合、人間とは、人類の一員である個人として把握されているかぎり、近代民主主義がこのような個人の要求に根差していることはいうまでもない。それゆえ、民主化とは、現実の社会関係を基本的人権の要求にふさわしいように作り直すことである。現実の人間関係や間柄を単に破壊することではなくて、それらを、「人間の尊厳にふさわしいように」という理想にてらし、「自由を平等に享受しうるように」という課題に副って、再構成することである。それゆえ、民主化（民主社会の建設）という仕事は、理想主義的努力なしには成就できない。したがって、ここでは、単なる現状維持は問題にならない。それは決して、現実主義的思考に立つものではないが、理想実現の方法については、それを単なる空想や独善におわらせないために、社会の具体的条件のリアルな研究を不可欠の要素とする。民主主義を生かすためには、このような理想主義的努力を必要とするが、所謂、「理想主義」につきまとう危険も警戒されなければならない。すなわち、ここでは、理想に対する自信過剰とその効果の急ぎすぎから、往々、同じ理想を持つべきことが強制されるという危険である。これは、民主主義を破壊するものである。何故なら、民主主義とは、その社会の成員一人一人の思考の自由化であり、解放だからである。しかし、民主主義も一つの立場であり主義であるためには、その解放された心が、おのずから基本的人権の尊重を忘れない心であって欲しいと希う。ここに、民主主義と教育とが不可分離に結びつく所以がある。これは「個々人の自発性の方向づけ」という一見矛盾するような課題である。したがってその教育とは、一方から他方への訓え込み

ではなく、辛棒強い対話や討議によって、我々の「理想」を納得し合い、理想を各々自発的に追求すべきことを相互に学びとるという仕事が必要となる。これが、民主主義の形骸化を防ぐ最も有力な方法である。ここに、自発的小集団が民主社会において果すべき大きな役割がある。

したがって、民主社会の秩序を支えているものは、上からの強権ではなく、社会成員のひとりひとりの民主化された心情の自発性である。そして、民主化された心情を我々の間にもたらすものは、「教育」の外にない。しかし、その所謂、「教育」が、いかなるものであるべきかは、すでに、上に述べてきた議論の中に、不十分ながら示唆されていると思う。すなわち、人間尊重の理念をかかげることは、やさしいことであり、ある程度、気持のよいことでもある。しかし、目の前の人間関係において、実際に、人間を尊重してゆくことは、至難の事柄である。所謂「教育」においては、この至難な仕事をいかにやりとげるかについての細心の配慮や指示がなされていることが必要である。民主憲法に裏付けられた制度をもつからといって、民主主義が健在だとはいえないので、その健在度はむしろ、違憲審査の行なわれ方如何に懸っている。同様に、教育の世界においても、民主憲法や教育基本法をもつからといって、そこに宣言されていることが、実行されているとは限らない。すでに述べたように、「宣言」が重要なのではなく、宣言に合致するような現実が重要なのである。だからといって、宣言が軽視されてよいのではなく、宣言に合致する現実が欠如しているとき、それを回復する拠点は、矢張、「宣言」に打出されている「理想」そのものに外ないことの認識が重要なのである。問題は、「宣言か実践か」でなく、「宣言とその実践」である。したがって、民主主義を単なる空文化させないためには、あくまでも、その「理由」のたゆみない追求と、その実践の細心な探究が必要である。

補説——ここで、われわれは、状況における「理想」のはたらきぶりを見てゆく必要がある。すでに見てきたように、デューイにおいては、状況に君臨する「理想」は、これを斥けている。何故ならば、そのような理想は、彼が最も大切なものと考えてい

る経験の成長を阻害するからである。この点は、「経験に基づく教育の中心課題は、現在の経験の中から、後につづく経験のうちに、稔り豊かに (fruitfully)、創造的に (creatively) に生きつづけるような種類の経験を選び出すことにある。」<sup>29)</sup>の言葉を見ても明かである。彼は理想を否定したのではなくて、未来を形成すべき現在の経験を萎縮させ窒息させるような「理想」を排除しようとしたのである。そこで希われていることは、あくまでも「立派な」経験、「質のよい」経験の出現ということである。すべての「よいこと」は、いきいきした現在の経験から生みだされるからである。したがって、「よいこと」——理想——は、彼方に固定されて、冷厳に人間の行動を監視しているようなものでなく、実は、人間の創造的な活動そのものを措いては、別にないと考えられているのである。それ故、ここでは、質のよい経験を追求する活動を起すということが、教育の最も大切な任務となる。

要するに、経験の哲学は、人生において、いいものが生みだされてゆく過程を、いきいきと描き出そうと努めている。そして、いいものは、人間の活動によって生みだされるもので、人間の活動を蔑視的に見下している、それ自身固定されている「理想」の中に、すでに在るものではない。したがって、「よいこと」が、価値のことばでなく、経験のことばで語られることになる。たとえば、「後につづく経験が、一層意味を増すような行為」をとってみても、自分の経験が、周囲に及ぼす影響を考慮に入れた行為を指していると見ることができる。すなわち、ここでは、他に対する関心配慮を伴う行為がよしとされていると見ることができる。このことを一層、一般的な言葉でいい表せば、「人間の尊厳に相応わしい間柄」とか、「基本的人権を相互に尊重する行動」とかと言えらると思う。このように、経験の言葉で語られることがらも、その経験の核心をなすような言葉である「一層秩序だった」「一層意味を増すように」「稔り豊かに」「創造的に」のような副詞的形容詞に盛られている内容は、尠くとも、その発言者にはわかっている筈の価値的なものである。そしてその価値的なものを「人間の尊厳に相応わしい間柄」とか、「基本的人権を尊重し合う行動」などと表現するのはなかろうか。

デューイが経験の質のよし・あしを、価値のことばでなく、経験のことばで語ろうとしたのは、価値を単に言葉だけに終らしめることなく、それを具体的状況における具体的経験において見ようとしたからであり、価値に見合う経験の出現をこそ希っていたからだといえよう。したがって、そこに期待されている経験は、すでに価値を荷い、それを体現したものである。こうした価値は、経験の中であって、その経験を動かしているものであって、決して、経験から遊離してそれ自身として在るものではない。いわば、働いている価値で、諦観の対象である「理念的」なものではない。

このように、或る経験に初めから賭けられた期待としての価値、経験の中であって、その経験を動かしている価値という考え方は、はたらきとしての価値を明示している

が、あるはたらきの結果としての価値を示しているものではない。それゆえ、デューイの「民主的人間関係は人間の経験の質を高めるから」という、民主主義選択の理由は、帰納的に得られた知識ではなくて、民主主義に賭けられた根元的な期待であるといわなければならない。したがって、民主主義に賭けられたこのような根元的期待は、実は、経験の哲学の帰結ではなく、その出発点だといわざるを得ない。とすれば、およそ、よきもの——理想・価値——の、見てとられ方の問題が、啓示と経験というような問題をも含みながら、更に追求されてゆかなくてはならない。(1970. 10)

## 註

- 1) Pragmatism を片カナで示し、訳語であらわさなかったのは、次のような理由にもよる。「プラグマティズムに、‘実用主義’という訳語をつけ、‘卑賤なアメリカニズムの哲学だ’と解する風潮が戦前のわが国では強すぎたし、また、戦後は政治的冷戦のあおりをくらって、‘プラグマティズムはアメリカ帝国主義の哲学だ’というたぐいのレッテルはりが横行しすぎた。……しいて訳せば‘実践主義’あるいは‘実働主義’という名が適切なような内容をもつのである。」(清水幾太郎編『現代思想事典』講談社中の p. 578「プラグマティズム」(市井三郎)の項参照。
- 2) Dewey, John : *Experience and Education*, The Macmillan 1950 (以下, EE と略す) pp. 25, 26.  
原田 実訳『経験と教育』春秋社。
- 3) Dewey, *Philosophy of Education (Problems of Men)* pp. 44, 45. 圏点筆者。
- 4) Dewey, *Reconstruction in Philosophy*, The Beacon Press, 8th print. 1965, pp. 26, 27.  
清水幾太郎  
礼子 訳『哲学の改造』岩波文庫。
- 5) 「筋の通った」とは、‘ordered and intelligent’の意味をとって当てて見た。
- 6) Dewey, *Democracy and Education*, The Macmillan 1954, p. 65.  
帆足理一郎訳『民主主義と教育』春秋社。
- 7) Dewey, *Human Nature and Conduct*, The Modern Library, (1922) 1950, p. 283. 圏点筆者, (以下 HNC と略す。)  
東宮 隆訳『人間性と行為』春秋社。
- 8) HNC, p. 281.
- 9) HNC, p. 283, 尚同頁に「未来とは現在の主題内容 (the subject-matter) の客観化 (projection) だ」という言葉もある。
- 10) この点については, EE, VI, *The Meaning of Purpose* に詳しく説明されている。
- 11) HNC, p. 265(圏点筆者).      12) EE, p. 13.      13) EE, p. 16.

- 14) Dewey, *A Common Faith*, Yale Univ. Press, 1955, p.49 (以下 CF と略す。)

岸本英夫訳『誰でも信仰』春秋社。

尚, 以下で “imagination” を「思惟と想像」としたのは, 上の訳書に依ったものである。

- 15) CF, pp. 79, 80 圈点筆者。

尚, A. M. シュレジンガー著  
大前正臣訳『信頼の崩壊』読売新聞社, p. 117に次の言葉がある。

「情熱のない理性は不毛である。理性のない情熱はヒステリーである。」

- 16) 湯川秀樹著『人間にとって科学とは何か』中公新書。p. 75  
梅棹忠夫

- 17) 同書 p. 74. 18) CF, p. 43, 圈点筆者。

- 19) Lindsay, A. D. *The Essentials of Democracy*, Oxford Univ. Press, 1st ed. 1929, 6th imp. 1967, (以下 ED と略す。)

永岡 薫訳『民主主義の本質』未来社, 1967。

- 20) ED, p. 10. 21) ED, p. 12. 22) ED, p. 15. 23) ED, p. 12.

- 24) ED, p. 13.

- 25) 東大社会科学研究所編『基本的人権』(全五巻)1968—1969。

I. 総論 (第一章「近代国家における基本的人権」) p. 6.

尚, 私は, 曾って拙著『民主主義の倫理と教育』理想社, 1962, において, 世界人権宣言の「すべての人間は, 生れながら自由で, 尊厳と権利について平等である」という命題は, 事実命題ではなくて, 当為命題として把握すべきことは指摘しておいた。

- 26) 同上書, p. 10. 27) 同上書, p. 11. 28) 同上書, p. 12.

- 29) EE, pp. 16, 17.

## What gives life to Democracy?

—pragmatism versus idealism—

Gunzo Kojima

We prefer democracy to other forms of government because we expect democracy to improve the quality of human experience. In this sense, democracy becomes for us, as Dewey put it, “the greatest experiment of humanity—that of living together in which the life of each of us is at once profitable in the deepest sense of the word, profitable to himself and helpful in the building up of the individuality of others.”\* Therefore, to develop such fundamental relations among ourselves is the very aim and purpose of democracy.

Under this interpretation, we are compelled to consider democracy as a form of moral idealism. This idealism, however, does not imply that idealism which is abruptly placed upon concrete reality from without. However, it does imply an idealism as accompanied with appropriate means for the realization of the ideal without threatening and impoverishing the present.

Contemporary democracy is being questioned. Consequently, in order to give life to it, it is desirable to achieve the synthesis between pragmatism which regards consequences first, and idealism which gives foremost respect to the end.

---

\* John Dewey, *Philosophy of Education (Problems of Men)* Littlefield, Adams, 1958, p. 45